

ヤコブソンの影：ソ連記号学の系譜における 「実体－言語－体系」の問題試論

中村唯史

1.

ソシュールの研究で知られた言語哲学者の丸山圭三郎は、1980年の論考で次のように述べている。

この、『講義』というソシュール現象を肯定的にとらえて発展させたのは、二つの学派に属する人々であった。第一のものは、一九二六年にV・マテジウス、R・ヤーコブソンが中心となって創立したプラハ学派であり、それには、『講義』出版後いち早くこの内容をモスクワに紹介した（一九一七年）S・カルツェフスキー、マテジウスの弟子のB・トゥルンカ、詩的言語の研究者J・ムカジヨフスキーらが加わり、二年後にはN・S・トルベツコイも参加した。彼らは、ソシュールのラング、パロールの概念と、『対立』の概念を音韻体系のレベルに応用し、不変体の言語単位すなわち《音素》と、その現前された可変体《変異体》の関係を初めて規定したところから、音韻論学派とも呼ばれている。（強調は丸山）¹

このような見解が、レヴィ＝ストロースが後にニューヨークでヤコブソンの講義を聴いて感銘を受け、その方法を神話分析に応用したことと結びついて、「ソシュール－ヤコブソン－レヴィ＝ストロース」という、現在でもほぼ定説とされている記号学・構造主義の系譜の見取り図ができたのである。ちなみに、丸山が論考中でソシュールの思想のもう一つの継承者として挙げているのは、L. イェルムスレウらのコペンハーゲン学派である。

丸山の記述の言語学的な正誤は本稿の課題ではない。ただし、ソシュールを「肯定的にとらえて発展させた」代表的な一人とされているヤコブソンが、じつはその長い生涯にわたって何度もソシュールを批判していた事実については、考えてみる価値がありそうだ。その批判が、部分的ないし発展的な修正というよりも、ソシュールの思考の枠組自体に関わるものだったからである。

ソシュールの死後、その晩年の講義の内容をバイイとセシュエがまとめた『一般言語学講義』（以下『講義』）がフランス語で刊行されたのは1916年である。その内容は、丸山

¹ 丸山圭三郎「ソシュール・その虚像と実像」『現代思想』1980年10月号、89頁。

によると、すでに翌 1917 年にはモスクワに紹介されていたようだが、ヤコブソンが『講義』を入手し、直接に読んだのは、彼自身の言によれば、1920 年に到着したプラハでのことだった。²

ヤコブソンがソシユールに対する明示的な批判を行うようになったのは、1959 年の講演「言語の記号と体系：ソシユール理論の再評価」の頃からだろう。ただし、1975 年に書いているところによれば、彼は 1926 年にソシユールに対する批判をトルベツコイに書き送っている。³ また、ヤコブソンとトゥイニャーノフが共同で執筆し、『ノーヴィー・レフ』誌 1928 年 12 月号に掲載された論考「文学および言語研究の諸問題」でも、「ラングーパロール」「通時態—共時態」などの『講義』の枠組の修正が試みられている。

実際、著者死後の 1985 年にクリスティナ・ボモルスカらによって編まれたヤコブソンの論集『言語芸術・言語記号・言語の時間』では、「文学および言語研究の諸問題」（ただし論集では題名中の「文学」と「言語」の順序が逆になっている）と「言語の記号と体系」との並録に、1980 年のボモルスカとの対談「言語と文学における時間についての対話」が付されて「時間の次元」と題する 1 セクションをなしているが、⁴ これらの論考の趣旨は、成立時期の隔たりにもかかわらず、互いによく似ている。また、この論集の編者の一人でもあるボモルスカは、1959 年の講演「言語の記号と体系」が 1929 年の論文「ロシア語の発達に関する考察：他のスラヴ諸語の発達を比較して」で述べられた思想の敷衍であることを明言している。⁵ ソシユールに対するヤコブソンの姿勢は 1920 年代の末までには確立し、それ以降は 1982 年の死に至るまで、ほぼ一貫していたと考えられるのである。

2.

ヤコブソンのソシユール批判とは、どのようなものだったのか。主に上記『言語芸術・言語記号・言語時間』所収の諸論考に即し、ヤコブソンのその他の言説も視野に入れつつ、概観してみよう。

「記号の恣意性」に対する批判。「言語の記号と体系：ソシユール理論の再評価」は 1959 年に東独のエルフルトで開催された同名の第一回国際シンポジウムでの講演に基づいているが、その中でヤコブソンは、『講義』の二つの基本原理（ソシユールが les deux

² Якобсон Р. Структурализм и телеология // Язык и бессознательное / Под ред. Ф. Успенского. М., 1996. С. 181.

³ Prepared for publication by Roman Jakobson, *N. S. Trubetzkoy's Letters and Notes* (The Hague and Paris: Mouton, 1975), p. 96.

⁴ Roman Jakobson, *Verbal Art, Verbal Sign, Verbal Time* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1985), pp. 9-33. / 日本語訳はロマン・ヤコブソン（浅川順子訳）『言語芸術・言語記号・言語の時間』法政大学出版局、1995 年、11-47 頁。以下、本稿では、注に原典と一般的な邦訳書を示す。ただし、本文中の引用の日本語訳は著者による。

⁵ *Ibid.*, p. ix. / 同上、xiii 頁。

principles généraux と名付けたもの)のうち、ひとは今日、第一の基本命題である記号の『恣意性』 *l'arbitraire du signe* を恣意的原理と見て良いのである」と、ややレトリカルに述べている。⁶

ソシュールの言う「記号の恣意性」は、互いに関わり合っているとはいえ、二つに分けることができる。第一の恣意性は、記号の内部の記号表現 (signifiant) と記号内容 (signifié) との間に自然かつ論理的なつながりが存在しないことの指摘である。ソシュールが「シニフィエ」として想定していたのは、厳密に言えば、語という記号において音と結合している概念だが、バンヴェニストが指摘しているように、概念はまた記号外の現実や思念と分かちがたく抱合している表象だから、⁷ 第一の恣意性は言語と実体 (实在／現実) との関係の恣意性とも見ることができる。

第二の恣意性は、言語体系の内での各語の守備範囲が、隣接する他の語との関係によってのみ定まるということである。たとえば「小説」という語の指示する範囲が、言語体系によって、あるいは時代によって激しく変動してきた例に見るように、⁸ ある語の意味 (その守備範囲) は、直接的にはその指示対象との関係よりも、隣接する諸語の守備範囲との相関に応じて拡張したり収縮したりする。語と語の守備範囲 (語義) の境界は、時の経過につれて移ろい動き、不変ではない。

ヤコブソンは、「あるのは諸記号の体系と対象の世界との相関であり、記号自体は、何よりもまず他の記号と相関している」と述べたことがあり、⁹ 第二の恣意性については必ずしも否定的ではない。彼が明確に批判したのは、第一の恣意性の方である。「言語と記号の体系」中の一節を例に取ろう。

言語記号を用いる言語共同体の共時的観点からみると、言語記号に恣意的な性質を帰するわけにはいかない。フランス語で《チーズ》のことを *fromage* と言い、英語では *cheese* と言うことは、まったく恣意的ではなく、むしろ義務的である。《恣意性》と《動機づけされていない》記号についてのすべての議論を考慮するに、恣意性 *l'arbitraire* という用語の選択は非常に不適切であったと結論できるだろう。[...] ソシュールが恣意的に恣意的なものと表現した《記号表現》 (signans) と《記号内容》 (signatum) の関係は、実際には習慣的な、学習された近接であり、所与の言語共同体に属する全成員にとって義務的なものなのである。¹⁰

⁶ *Ibid.*, p. 28./同上, 39頁。

⁷ エミール・バンヴェニスト (川村正夫ほか共訳) 『一般言語学の諸問題』みすず書房, 1983年, 56頁。

⁸ 野口武彦 『一語の事典・小説』三省堂, 1996年。

⁹ Якобсон. Р. Некоторые вопросы лингвистической семантики. // Незабываемые голоса России I: Звучат голоса отечественных филологов. М., 2009. С. 207./ロマン・ヤコブソン「言語学的意味論の問題」(桑野隆・朝妻恵理子編訳) 『ヤコブソン・コレクション』平凡社, 2015年, 276頁。

¹⁰ Jakobson, *Verbal Art, Verbal Sign, Verbal Time*, p. 28./ヤコブソン『言語芸術・言語記号・言語の時

共時態と通時態の峻別に対する批判。ソシュールの『講義』において提唱されているような、一定時期の言語を意味する「共時態」と、時の経過とともに起こる言語的变化を意味する「通時態」との別について、1920年代のヤコブソンは「共時的（静的）断面と通時的断面を著しく対立させることは、言語学にとっても、文学史にとっても、つい最近まで生産的な作業仮説だった。なぜなら当該の対立が、言語、さらに文学が現実の個々の瞬間に持つ体系的性質を示してくれたからである」と、一定の評価を与えている。ただし、この評価はあくまで限定的である。その直後に「今では、純粋な共時性など幻想であることが判明している」とも述べているからだ。

あらゆる共時的体系は、その過去と未来を、体系の不可分の構成要素として持っている。(a) 文体上の事実としてのアルカイズム、費消された古風なスタイルとして認識される言語的・文学的背景、(b) 体系のイノベーションとして認識される言語・文学における革新的傾向。¹¹

「文学および言語研究の諸問題」からの引用である。後期ロシア・フォルマリズムの優れた達成と現在でも見なされているこの論考は、初期には個々の作品内の構成要素間の相関関係に関心を集中させていたロシア・フォルマリズムが、考察の比重をジャンルの問題、文学とこれに隣接する諸系列との関係、文学史の問題へとしだいに移し、しかし主要メンバー間で見解の不一致が表面化するなかで、療養のため一時出国したトゥイニャーノフとプラハに在住していたヤコブソンが、ソ連国内に留まっていたシクロフスキーと連絡を取りつつ、文学や言語の通時的研究の基本原則を確立する目的で議論を重ねた末に両者の連名で発表したものである。¹²

さて、ヤコブソンのこれらの指摘は、私たちにとって経験的に納得のゆくものだ。ひとの心身は習得した母語の体系に大きく規定されるが、自分の母語を選択することはできない。ソシュールの第一の恣意性は、諸言語を俯瞰し比較対照できるような視座に立って初めて言えることであり、特定の言語共同体に属する一般話者にとって、記号の表現と内容の紐帯は選択の余地のないものである。ワンワンと鳴く動物を指示する語は、日本語を母語とする話者にとっては必ずや *inu* であって、*sobaka* ではない。また、「古くさい」言葉と新語の共存も、私たちが常時、ほとんど反射的に認知しているところである。共時的体

間』、39-40頁。

¹¹ Тынянов Ю., Якобсон Р. Проблемы изучения литературы и языка // Ю. Н. Тынянов. Литературный факт. М., С. 149. / 新谷敬三郎・磯谷孝編訳『ロシア・フォルマリズム論集：詩的言語の分析』現代思潮社、1971年、139頁。

¹² この間の事情については、中村唯史「歴史への内在：ボリス・エイヘンバウムの世界観」『山形大学人文学部研究年報』第6号、2009年、121-124頁を参照されたい。

系が不可分の構成要素として過去と未来を包含しており、したがって共時態と通時態の峻別は不可能であるというヤコブソンの指摘は、自分自身の言語体験を少し顧みるだけで納得できる。

だが、ヤコブソンのソシユール批判が経験のレベルで説得力を持つことを承認したうえで、私たちは彼の論法にひとつ一貫した特徴があることに留意しよう。ヤコブソンのソシユール批判は、一言で言えば、ソシユールの基本概念が「事実」に合致していないということなのだ。共時態と通時態の峻別に関する「言語の記号と体系」中の批判を見よう。

実際には (in actual reality) 共時態はまったく静的ではない。変化はつねに現れており、共時態の一部だからだ。実際の共時態 (actual synchrony) は動的なものである。静的な共時態というのは特定の目的のための言語調査には有益かもしれないが、抽象概念 (an abstraction) である。事実に対して完全に忠実に言語を共時的に記述 (an exhaustive true-to-the-facts synchronic description of language) しようとするなら、言語の変化をつねに考慮しなくてはならない。¹³

ヤコブソンのこの論法は、ソシユールのもう一つの重要概念「ラング」と「パロール」に関しても同様である。

もしも《ラング》をある言語の諸々の慣習の総体であると考えるなら、私たちは虚構を捜し求めることのないように極めて注意しなければならない。¹⁴

ヤコブソンのソシユール批判の言説には、類似の表現が頻出している。「記号の恣意性」や「共時態－通時態」などのソシユールの概念は、現実に合致しないゆえに「幻想」(illusion) であり、「虚構」(fictions) であるとヤコブソンは言う。

3.

ヤコブソンのソシユール批判を読んでいると、ある種の掛け違いが生じているとの印象を受ける。言語思想史家の立川健二は、これを次のように的確にまとめている。

これ（「文学および言語研究の諸問題」中の、ソシユールが共時態と通時態を峻別したことへの批判）は一見もっともな指摘であって、言語の「現実」なるものをただしくとらえていると

¹³ Jakobson, *Verbal Art, Verbal Sign, Verbal Time*, p. 30./ヤコブソン『言語芸術・言語記号・言語の時間』, 43 頁。なお、これは「文学および言語研究の諸問題」で既に行われていた批判の反復である。

¹⁴ *Ibid.*, p. 31./同上。

もいえそうだが、しかしソシュールにたいする批判としてはなりたっていない。というのも、ヤコブソンは、科学認識論(エピステモロジー)上の重大な区別を理解していないからである。アルチュセールも指摘しているように、共時態と通時態は、あくまでも理論によって構築された「認識対象」(objet de connaissance)であって、実体として与えられている「現実対象」(objet réel)ではない。ソシュールの「言語観」が示唆していたように、言語は刻々と変化しており、一瞬たりとも静止した相をしめすことがないというのが「現実」であるとしても、言語理論がそこに静止状態としての〈共時態〉という「認識対象」を構成することは、けっして無根拠なことではないのである。¹⁵

ソシュールは、言語的現実を体系的に記述する目的から、「記号の恣意性」「共時態一通時態」「ラングーパロール」等の諸装置を設定したのである。ソシュールにとって体系とは記述主体の立場から構築されるものであり、したがってそれが経験的現実と合致しないから問題があるという批判は、本来的に無効なのだ。任意の言語がどんな段階でも古語と新語を含んでおり、それが話者によって認識される以上、共時態と通時態を峻別できないというヤコブソンの指摘は経験的に正しいが、ソシュールの側から言えば、そう語るためにも「共時態一通時態」をいったん峻別して考える操作が必要なのである。

1916年に刊行された『講義』が、ソシュールの「認識論的革命」を全面的には捉えられなかった弟子たちによって編まれたものであることが判明したのは、ソシュールの未発表原稿を研究していたロベール・ゴデルが『一般言語学講義現資料』を出版した1957年である。ソシュールの思考が非実体論的なものであり、その諸装置が「体系」を構築するために方法論的に設置された基点、一種の作業仮説であることは、この時点で初めて明瞭になった。ヤコブソンが1920年にプラハで読んだと思われる『講義』には、「記号の恣意性」「共時態一通時態」「ラングーパロール」などを実体論的に語る記述が散見されるが、それらの多くが編者たちの誤解に基づく編集や増補の結果であることが、今では明らかになっている。

1928年の「文学および言語研究の諸問題」における「共時態と通時態の峻別」に対する批判は、当時のヤコブソンが『講義』をめぐる複雑な事情を知るはずもない以上、正当な対応だったと言えるだろう。「言語の記号と体系：ソシュール理論の再評価」は1959年の講演だが、わずか2年前に刊行されたゴデルの研究が、まだヤコブソンにまで達していなかった可能性は十分にある。

だがヤコブソンは、1980年の対談「言語と文学における時間についての対話」でも、なお「共時的・通時的、静的・動的、これら二つの効果的な対立は、現実においては一致

¹⁵ 立川健二『《力》の思想家ソシュール』水声社、1986年、159頁。

しません」¹⁶ と従来の批判をくり返している。ゴデル以降のソシユール像の転回をヤコブソンが最後まで参照することがなかったのか、あるいは知ってはいたが理解しなかったのかはわからないが、確かに言えることはソシユールとヤコブソンの言語観の隔たりである。フランスの研究者のパトリック・セリオは、ヤコブソンが「ソシユールの『視点』と『価値』の理論が帯びていた認識論的革命に気づくことすらなく、実体論的な探求に迷い込んでいた」と批判的な立場から述べているが、¹⁷ その評価の是非ははともかくも、ソシユールのな枠組がヤコブソンの思考にとって異質なものであったことは確かである。

4.

ソシユールの諸概念は、記述主体がその立ち位置から目的論的に体系を構成するための装置であり、そもそも経験論的な現実に実在するものではないのだから、それらが現実に合致しない点を衝いても、それは掛け違いになる。この点で私は立川の指摘に同意するものだが、ここではさらにヤコブソンが晩年にいたるまでソシユールに対する批判を繰り返した理由を考えてみたい。論理的に克服されるものなら批判は一度で済むはずだ。逆に言えば、ヤコブソンの執拗なまでの反復は、彼にとってソシユールの枠組が論証で斥けられるようなものではなかったことを示唆している。言語がいかなるものかという、そもそもの基点から、すでに両者は食い違っていたのである。

ソシユールが実体論的な意味での現実／実在を否定していたわけではないが、セリオの的確な表現を借りるなら、彼にとって「総体としての経験的現実は、無窮である」。¹⁸ 法則性や目的性がないか、たとえあったとしても人間には知りえないという意味でカオスである。ソシユールが「記号の恣意性」「共時態—通時態」「ラング—パロール」などの明快な二項式を自身の言語学の基本に据えたのは、現実が二項対立的だからではなく、混沌である現実を論理的・体系的に語るための必要からだった。構造や法則は現実それ自体のうちに在るのではなく、記述主体が自身の目的に基づいて現実から抽出した諸現象を組み合わせで構築した体系のうちに宿るものだと、ソシユールは考えていたのである。

ソシユールのいう〈通時態〉とは「共時態と共時態のはざまに生起するできごとそのもの、変化そのもの」「多種多様な《力》の運動・流動」であるとの立場を取る立川健二は、ソシユールの思考とアンリ・ベルクソンの哲学との類似性を指摘している。実体（ソシユールにとっては言語的現実、ベルクソンにとっては「生の流れ」）は運動であるがゆえに、

¹⁶ Jakobson, *Verbal Art, Verbal Sign, Verbal Time*, p. 12./ヤコブソン『言語芸術・言語記号・言語の時間』, 14頁。

¹⁷ Серю П. Структура и целостность: об интеллектуальных истоках структурализма в центральной и восточной Европе 1920-30-е гг. М., 2001. С. 313.

¹⁸ Там же. С. 317.

静的な概念や言葉によって理解したり記述したりできないものだとの認識において、両者の間には親近性があると言うのである。¹⁹ もっとも、ベルクソンは、ひとは「生の流れ」を言語化・概念化はできないものの、「直観」によって直接的に体験はできると考えていたわけだが、それとは逆に、ソシュールは二項式の装置を用いることで、「経験的現実の無窮」とは別の審級に合目的体系を構築しようとしたのである。

ヤコブソンは、トルベツコイに宛てた 1926 年 10 月の書簡中で、「音声の変化を、言語体系の如何に関わらず生じる盲目的で偶然的な出来事と見なすソシュールの態度」を捨て、「対象を微粒子化するこの機械的なアプローチを、変化を全音声学的体系の構成要素として捉える内在的に言語学的な解釈に代えなければならない」と主張したと言う（強調はヤコブソン）。²⁰ ヤコブソン自身のこの説明を信じるなら、彼はこの時点でソシュールの言語観をすでに的確に理解したうえで、言語的現実を「盲目的で偶然的」と見なす「機械的なアプローチ」として、これを斥けていたということになる。

ではヤコブソン自身の言語観はどのようなものだったのか。彼はポモルスカとの対談の中で、この 1926 年のトルベツコイとの手紙のやり取りを回想し、当時の（そして対談が行われた 1980 年まで変わることはない）自身の言語観を「言語変化は体系的で、合目的である」「言語の進化は、他の社会文化的体系の発展とその目的性を共有している」と説明している。²¹ さらに、トルベツコイの 12 月 22 日付の返信中の次のような一節を、自分が今も全面的に同意する見解として引用しているのである。

あなたの一般的な考察に完全に同意します。言語の歴史においては多くのものが偶然のように見えますが、そのような説明に安らいでいる権利を歴史家は持ちません。言語の歴史の全般的流れは、いくらか注意して論理的に考えさえすれば、偶然ではないことが必ずわかります。したがって、個々の細かな部分も偶然などではあるはずがありません。すべては、その意味を捉えることにあるのです。言語の進化の合理性は、言語が体系であることに直接由来するものです。²²

ソシュールとヤコブソンの言語観の相違は明らかだろう。①言語的現実をカオスと見たソシュールに対して、ヤコブソンは言語自体が合目的性と法則性を有していると考えていた。②カオスである言語的現実を前にして、記述主体が自覚的に体系を構築することを提唱したソシュールに対して、ヤコブソンは記述主体の課題は「言語共同体において客観的

¹⁹ 立川『《力》の思想家ソシュール』, 222, 296-297 頁ほか。

²⁰ N. S. Trubetzkoy's Letters and Notes. p. 96.

²¹ Jakobson, *Verbal Art, Verbal Sign, Verbal Time*, p. 16./ヤコブソン『言語芸術・言語記号・言語の時間』, 21 頁。

²² *Ibid.*/同上。トルベツコイの書簡の翻訳は N. S. Trubetzkoy's Letters and Notes. pp. 96-97 のロシア語原文に拠った。

に所与であるコードをメタ言語に置き換えようとする事だけだ」²³と考えている。③ソシュールにおいて言語的現実と言語学者が構築する体系とが二律背反の関係にあるのに対して、ヤコブソンにおいて両者は滑らかに連続している。

ヤコブソンは1974年の論考「構造主義と目的論」の中で「ソシュールの思想は全般的に反目的論的である」と述べているが、²⁴これが上記のような彼の立場からの発言であることを忘れてはならない。このような立場から見れば、記述主体が目的論的に構築するソシュールの体系は、言語という実体に内在しているのとは異なる合目的性・法則性に拠るのであり、したがって「虚構」ということになる。

このような言語観は、ヤコブソンが「言語の記号と体系」においてソシュールの「記号の恣意性」批判の優れた先行例として挙げたバンヴェニストとも違っているように思われる。バンヴェニストがソシュール批判を行った論考「言語記号の性質」(1939)を読むと、言語の外部をカオスと見ている点（「思考とは、その中に何一つ画然たるもののない星雲のごときものである」）、²⁵法則ある体系が現実在るのではなく、方法的に設定される記述主体の立場から構築されるものであると認識している点（「それ（記号の恣意性）はただ、シリウス星の無感動な眼で見てのみ、そうなのである」）²⁶など、彼がソシュールの「認識論的革命」をよく理解したうえで「記号の恣意性」を批判していることがわかる。バンヴェニストが一般的な話者にとって記号表現と記号内容の紐帯が必然的、義務的であることを強調したのは、ソシュールの基本概念を現実と合致しない虚構であると見なしたヤコブソンとは違って、言語学の認識論的視座を言語共同体に属する一般的な話者の立場に置くべきだと考えていたからである。

「言語記号の性質」のなかで、じつはバンヴェニストはソシュールの「記号の恣意性」が誤っているとは述べていない。言語と言語外の現実（実在／実体）との紐帯が恣意的であるか必然的であるかは、確定できない問題である以上、言語学の課題ではないと言っているのである。

なぜなら、この問題（「記号の恣意性」の正誤）は、かの有名な「自然か人為か？」の問題にほかならず、天くだりの裁断にまたねば解決できないからである。実際これは、言語学の用語に置き換えられてはいるが、精神と世界との一致という形而上の問題であり、おそらくいつかは言語学者がこれにとり組んで成果をあげることもできようが、さしあたりは放置しておく

²³ Jakobson, *Verbal Art, Verbal Sign, Verbal Time*, p. 31./ヤコブソン『言語芸術・言語記号・言語の時間』, 44頁。

²⁴ Якобсон. Язык и бессознательное. С. 182.

²⁵ バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』, 58頁。

²⁶ 同上, 57頁。

方がよい問題であって、この関係を恣意的として措定するのは、言語学者としては、この問題、および話し手 *sujet parlant* が本能的にこの問題にくだしている解決から身を守る一方法なのである。²⁷

なぜ「記号の恣意性」の当否が判断不可能かと言うと、その理由は人間が言語によって世界を分節し、構造化して把握しているために、言語外の実体（实在・現実）としての世界それ自体、「物自体」の世界を認識するすべを持っていないからである。

話し手にとっては、言語と实在との間に完全な相等関係が存在する。つまり、記号は、实在を覆い、それを支配する。それどころか記号は、まさに实在そのものである。（強調は著者）²⁸

このようなバンヴェニストの言語観・世界観は、じつはソシュールからそう隔たつてはいない。二人とも現実、实在それ自体は人間にとって不可知の領域であると考え、言語・記号の体系と实在との間に一線を画している。ともに、实在と記号の領域とのアンチノミーを想定している。ただし、实在と記号体系の間に恣意性だけを見いだしたソシュールに対し、バンヴェニストが、人間の認識裡での实在に対する記号体系の圧倒的な優位を想定していたことが大きな違いである。記号が「实在を覆い、それを支配する」からこそ、实在は人間にとって認識しえない領域なのである。バンヴェニストの「記号は、まさに实在そのもの」であるという一節は、1) 实在と記号の断絶、2) 記号による实在の分節（実体の上書き）という2段階の契機を言い表している。

ヤコブソンはそうではなかった。これまで見てきたとおり、1) 实在と記号の連続性、2) 言語体系に法則性・合目的性が内在していることは、ヤコブソンの思考の公理である。1) と 2) を連結して考えるなら、实在としての世界は合目的的で法則を持っており、諸言語体系もまたそのような世界の一部であるということになる。ヤコブソンの思考の枠組には、实在と記号のアンチノミーという発想が希薄である。

ヤコブソンがパースの記号論に何度も肯定的に言及し、これをソシュールの「記号の恣意性」に対置しているのも、そのことによって实在と記号の連続性を確保する目的からだったと考えられる。ヤコブソンは、1966年の論考「言語の本質の探究」の中で、パースの記号分類（「類像」「指標」「象徴」の3区分）のもっとも重要な特徴のひとつとして「記号の三つの基本的な分類の違いが相対的な階層性の違いに過ぎない」ことを挙げ、そこではすべてのタイプの記号において上記「三つの機能がさまざまに相互に補い合っているこ

²⁷ 同上、58-59頁。

²⁸ 同上、59頁。

と」を高く評価している。²⁹ 記号を類像的性質と指標的性質、象徴的性質が混ざり合っているものと捉えたパースの称揚を通じて、実在の世界と記号体系との断絶ではなく、滑らかな連続性を主張したのである。

5.

話は少し遡るが、ヤコブソンの言語観・世界観のこのような特徴は、1910年代半ばから彼と密接に連携し、しだいに「ロシア・フォルマリズム」と総称されるようになった批評家たち、特にエイヘンバウムによっても意識されていたように思われる。

1920年代前半のフォルマリズム批判に対して最も戦闘的な論陣を張ったエイヘンバウムが、じつは革命後の数年間という短い期間しか「形式主義」への確信を持てなかったこと、彼が生涯一貫して追究したのが現実／実在と表象との関係の問題だったこと等については以前に書いたことがあるので、³⁰ ここでは繰り返さない。本稿の文脈に即して手短に言えば、エイヘンバウムは1920年代半ばから実在と表象の関係を連続的ではなく恣意的と捉え、両者の間に照応ではなく深淵を見るようになるのだが、フォルマリズムに最も接近していた1910年代末から1920年代初めにかけては、彼の見解はなお激しく揺れ動いていた。

エイヘンバウムが当初関心を向けたのは身体、特に声という実在と文学作品内の言語表象との関係であった。1918年の論考「語りのイリュージョン」では、詩のジャンルにおける文字に対する声の先行性と優位性が認められている。詩に書かれている言葉は、作者の脳裏にあらかじめ存在する声の痕跡、かつ声を再現するための符号であり、それ自体に自律性はない。

作家は書いていると我々は思っている。しかしそれはいつもそうというわけではない、芸術的な言葉の領域ではなおさらである。数年前、ドイツの文献学者（ジーファース、サラン他）は「眼の」文献学（Augenphilologie）」に代わる「聴覚」文献学（Ohrenphilologie）」の必要性を唱え始めた。これは非常に実り多い考えで、詩の領域ではそのような分析がすでに興味深い結果を生んでいる。詩は、その本質から言って、特別な種類の音声である。それは発音されるものとして思惟されるのであり、したがってそのテキストは書きつけ、記号に過ぎないのである。（強調はエイヘンバウム）³¹

²⁹ Roman Jakobson, “Quest for the Essence of Language,” in *On Language* (Massachusetts: Harvard University Press, 1990), pp. 411-412. / 「言語の本質の探究」『ヤコブソン・コレクション』, 288-289頁。

³⁰ 中村唯史「1910-20年代のエイヘンバウム：フォルマリズムとの接近と離反の過程」『スラヴ研究』（北海道大学スラヴ研究センター）59号, 2012年, 25-59頁。

³¹ Эйхенбаум Б. Иллюзия сказа // Сквозь литературу. Л., 1924. С. 152. / ボリス・エイヘンバウム「語

エイヘンバウムはまた、「その（芸術的散文の）基盤にも、口頭の語りの原理があり、その影響はシンタクス、構文、語の選択と配置、そして構成そのものにさえ現れている（強調はエイヘンバウム）」「語り手的なあり方、生きた口頭の即興性の要素が、書かれたものの中にも秘められている」などとも述べている。³² 実在の身体に根ざす声に作中の文字表象の基を見ることによって、エイヘンバウムは、この時点では、表象に対する実在の先行性と優越を認めていたのである。

このような立場は、翌 1919 年に刊行され、今日でもエイヘンバウムの代表的な論考と見なされている「ゴーゴリの『外套』はいかに作られているか」でも維持されている。この論考の中では、『外套』の語り口が作者ゴーゴリの特徴ある朗読や談話の反映とされている。「エイヘンバウムは、声として響くことばが書かれたことばに先行し、それがゴーゴリのテキストの最初のことばであって、意味構造の全体を与えるのだと考えた」という現代の批評家ミハイル・ヤンボリスキーの指摘は正鵠を射ている。³³

エイヘンバウムが音声と文字表象の断絶と後者の自律という見解にはっきりと転じたのは、1922 年刊行の『ロシア抒情詩のメロディカ』においてである。この見解は、エイヘンバウムがその後しだいに文学史に関心を移すにつれ、歴史と記憶、表象の関係にも敷衍されていくだろう。

エイヘンバウムは、『ロシア抒情詩のメロディカ』の中で、1918 年の段階では高く評価していた「聴覚文献学」を斥けている。この潮流は、詩の書かれた言葉は「生きた言葉のみじめな代用物にしかならず」、声がテキストに先行し、その基となっているという認識に立っていた。だから「文字のかたち凝固した詩は、口頭の解釈によって、発音（朗読 Vortrag）によって、再び生へと呼び出されなければならない」。³⁴ 「聴覚文献学」は明らかに、声と文字の間は断絶ではなく連続しており、したがって両者の間を往還することは可能であるとの前提に立っていたのだが、今やエイヘンバウムは正にこの点を批判する。

ジーファースの後継者たちは「聴覚」文献学に夢中になりすぎたあまり、詩の響きを思索的な表象のかたちで、すなわち、ちょうど音楽家たちが総譜を読むように知覚できるという可能性を忘れてしまったかのようだった。発音される言葉において、言葉のメロディは聞かれるようになる。しかし言葉のメロディは、発音されず、実現されたという思考上の仮想のなかにも、

りのイリュージョン」新谷・磯谷編訳『ロシア・フォルマリズム論集：詩的言語の分析』、237-238 頁。

³² Там же. С. 152, 153. / 同上, 238 頁。

³³ ミハイル・ヤンボリスキー（乗松亨平・平松潤奈訳）『デーモンの迷宮』水声社、2005 年、35 頁。

³⁴ Эйхенбаум Б. Мелодика русского лирического слова. Петроград, 1922. С. 11. / Борис・エイヘンバウム「ロシア抒情詩のメロディカ」新谷・磯谷編訳『ロシア・フォルマリズム論集：詩的言語の分析』、202 頁。

当然のことながら保たれている。ここで重要なのは、もちろん音読という点ではなく、聴覚的原理自体それ自体、詩の音声学的要素（この場合にはメロディの要素）を、狭義の意味的要素への付加物ではなく、ときには芸術作品を構成することさえある、積極的な原理として認めることなのである。³⁵

この一節において詩テキストは、「思考上の仮想のなか」でのみ響く（現実に響いているわけではない）聴覚的原理によって構成された、現実や実在とは一線を描いた体系と見なされている。それはもはや現実を指示するのでもなく、実在に還元されることもない。詩は音声（正確には聴覚的原理）をテキストに内在させつつも、自律しているのだから、聴覚文献学のように、それを事後的な肉声によって検証するのは倒錯である。

ジーファースを困らせたのは、(詩の朗読の) それぞれ個々の場合においてメロディをいかに客観的に確定するかという問題だった。彼は大量実験という手段に訴えてしまった。[...] 我々は自分たちの目的のためにこの種の実験の必要性があるとは思わない。朗読の個人的なニュアンスから独立して、シンタクスの組み立てはまったく客観的なものであり、シンタクスが示すイントネーションは、われわれが必要としているかぎりにおいて、普遍的な拘束力を有している。³⁶

もっとも、エイヘンバウムは「聴覚文献学」を全面的に否定しているわけではない。それは言語学的には重要なデータを提供するものである。だが詩という、一般言語とは異なる、それ自体が独自の内的論理によって統御されているテキストそれ自体を捉えようとするなら、これをテキスト外（肉声）に帰することなく、その内的な構成論理に直接に向かわなければならない。それは言語学とは一線を描いた詩学の役割である。

言語学は自然に関する学問の系列にあり、詩学は精神に関する学問の系列にある。詩的言語は言語学によって、(言語の) 一変種に分類される。目的の相違は、言語学にとって、言語現象を機能として分類するためにのみ役立ちうる。詩学は、特別な目的を持った活動としての詩的言語を言語現象一般の系列から分離することから始まる。この目的は正確に規定されえなくともかまわない。その徴候で充分である。こうして、詩学は目的論的原理の基礎のうえに構築され、したがって**手法**の概念から出発する。一方、言語学は、すべての自然科学と同様、因果律の範疇に関わるのであり、それゆえ現象そのものから出発する。(強調はエイヘンバウム)³⁷

³⁵ Там же. С. 13. / 同上, 204-205 頁。

³⁶ Там же. С. 16. / 同上, 208-209 頁。

³⁷ Там же. С. 14. / 同上, 206 頁。

6.

詩の書かれた言葉の表象と現実の身体に根ざした肉声とを峻別する独自の学問としての詩学の必要性を主張した『ロシア抒情詩のメロディカ』は、主にヤコブソンを念頭に置いて書かれており、その際にヤコブソンは詩学ではなく言語学の側に位置づけられている。このことは、論考中の次のことから明らかである。

1) エイヘンバウムは「言語学者たちが詩の理論家たちをナイーブであるとして叱責し、詩的言語に関する学問は現在まで『言語学の後をのこのことについて来ているに過ぎない』と断定するとき、彼らは正しい」と言語学に対して一定の譲歩を示しているが、この引用の出典がヤコブソンの『最新ロシア詩』であることが注で明記されている。³⁸

2) 「詩学が目的論的原理に立脚し、言語学は現象そのものから出発する」という前節最後に引用した箇所注の記述。

この問題は、幾度となく、モスクワ言語学サークルとペテルブルグの《詩的言語研究会》(オポヤズ)の間で議論の対象であった。その観点が上に引用した研究(『最新ロシア詩』を指す)によく現れているR・ヤコブソンは、詩学の構築のための目的論的原理の重要性を特に提起したV・シクロフスキーやV・ジルムンスキーと、一度ならず論争したのである。³⁹

本文中のこの注と、『ロシア抒情詩のメロディカ』序の末尾の「この仕事を友情と感謝の念をもって《詩的言語研究会(オポヤズ)》に捧げる」⁴⁰という一文とは明らかに呼応しているだろう。エイヘンバウムは、自分たち「オポヤズ」は目的論的原理に立っているが、ヤコブソンを初めとするモスクワ言語学サークルはその原理を共有していないと主張しているのである。

じつを言えば、この時期のヤコブソンとエイヘンバウムの論考自体が、互いにそれほど隔たっているわけではない。たしかにヤコブソンの『最新ロシア詩』が「韻の裸出化」「合成韻」「音素転位(メタテーズ)」、「恣意的な語創造」を「グロソラリア」と結びつけて捉えるなど、語のレベルの分類を羅列しているのに対して、エイヘンバウムの『ロシア抒情詩のメロディカ』に、詩のさまざまなシンタクスの特徴を「ロマンス型」「小唄や歌謡の形式」等のジャンルの別に結びつけようとする姿勢があるといった違いは認められる。だがヤコブソンにしても、その言語学的な分類の根底には「フレーブニコフの詩において、いかにして語が具象性を、さらに内的形式を、そして最後には外的形式をさえ喪失してい

³⁸ Там же. С. 13. / 同上, 205 頁。

³⁹ Там же. С. 14-15. / 同上, 206 頁。

⁴⁰ Там же. С. 4. / 同上, 194 頁。

くか」⁴¹ その過程を探究して、自分が現代に最も徹候的と見なす詩人の手法を解明しようとの目的意識があったのである。エイヘンバウムがヤコブソンとの間に距離を示そうとしたことは、今日に残されている論考だけではなく、「一度ならず」くり返されたが、記録されなかったロシア・フォルマリズム内部の論争を踏まえていたと見るべきだろう。

実際、ヤコブソンの側でも、エイヘンバウムが急逝した翌 1960 年の論考「言語学と詩学」の一部を、明らかに『ロシア抒情詩のメロディカ』を念頭に置いて書いている。ヤコブソンは「朗読者の読み方がどのようなものであれ、詩のイントネーション上の拘束は有効なままである。詩や詩人、詩的流派に特有のイントネーションの輪郭は、ロシア・フォルマリストたちによって議論に持ち込まれたなかでも、最も注目し得る話題のひとつである」と述べ、注のかたちで『ロシア抒情詩のメロディカ』を想起しているほか、「詩の韻文としての形姿は、可変的なその吟誦から完全に独立したままである」と「聴覚文献学」に対する批判においてもエイヘンバウムと同様の立場を表明している。⁴² だが、詩の言語表象と実在する音声、学問としての詩学と言語学の峻別という『ロシア抒情詩のメロディカ』の主張に関しては、ヤコブソンは次のように真っ向から反論しているのである。

言語学には言語芸術のすべての範囲における研究を指導する権利と義務があることを証明しようとする私の試み [...]。もし詩人ランサムの「詩とは一種の言語である」という言葉が正しいとすれば（そして彼は正しい）、あらゆる種類の言語をフィールドとする言語学者は、詩を自分の研究に含めることができるし、含めなければならない。ポール・ヴァレリーの「文学とは、言語のあるいくつかの特性の拡張と応用の一種であり、それ以外の何物でもありえない」という聡明な教訓を忘れないようにしよう。[...] 実際、ホルンダーも述べたように、「おそらく、文学研究を包括的な言語学から分離しようとする理由は何一つないようだ」。⁴³

これはエイヘンバウムに対する時空を超えた応答ではないだろうか。「仮説にも権利を与えよ、詩学と言語学を混同するな」⁴⁴ という 40 年近く前のエイヘンバウムの呼びかけを、ヤコブソンは断固として拒絶しているのである。

⁴¹ Якобсон Р. Новейшая русская поэзия. Набросок первый: Подступы к Хлебникову // Roman Jakobson. *Selected Writings. V: On Verse, Its Masters and Explorers* (The Hague and Paris: Mouton, 1979), p. 354. / ロマン・ヤコブソン（北岡誠司訳）「最も新しいロシアの詩—素描—」, 水野忠夫編『ロシア・フォルマリズム文学論集 1』せりか書房, 1984 年, 186 頁。

⁴² Roman Jakobson, "Linguistics and Poetics," in *Language in Literature* (Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press, 1987), pp. 79, 81, 509. / ロマン・ヤコブソン「言語学と詩学」『ヤコブソン・コレクション』209-210, 212, 238 頁。

⁴³ *Ibid.*, p.93. / 同上, 234-235 頁。

⁴⁴ Эйхенбаум. Мелодика русского лирического слова. С. 17. / 新谷・磯谷編訳『ロシア・フォルマリズム論集：詩的言語の分析』, 210 頁。

時空のみならず幽明の境さえも超えたヤコブソンとエイヘンバウムのこの論争を、単に個人的な軋轢や、グループや学問分野の覇権争いと捉えてはならない。両者の思考の枠組、世界観・言語観・芸術観の差違に根ざした、切実で抜き差しならない立場の違いだからだ。

エイヘンバウムは「事実」(实在／現実)を無窮であり、たとえそこに合目的性や法則性があったとしても、それらは人間にとって捉えがたいものであると考えていた。

概して事実というものは、それ自体としては存在しない。あるいは、より正確に言うなら、事実があまりに多すぎて、それらの間の相違に気づいたり、それらのなかに様々なグループを識別したりすることはできないのである。⁴⁵

このような意味でカオスである現実の中で人間がなすべきは、自分の立場から合目的な体系を構築していくことである。もちろんそれは实在／現実根ざした体系ではないから、あくまでも「作業仮説」に留まるかもしれない。だが人間は「作業仮説」の有効性と生産性を絶えず検証し続けることで、カオスである实在／現実の中を進んでいくためのパースペクティヴを持つことができる。

このようなエイヘンバウムの立場は、1927年の論考『文学的ブイト』において、明確に表現されている。

私たちはすべての事実を一度に目にするわけではなく、またいつも同一の諸事実を目にしているわけでもない。必ずや同じ相関関係の解明を必要としているとも限らない。[...] 文書やさまざまな回想に横たわっている膨大な過去の素材は、ただ部分的にだけ目に留まるのである(そしていつも同じ素材であるわけではない)が、それは理論が、あれたこれやの意味上のしるしによって、その(過去の素材の)一部を体系に導入する権利と可能性を与えてくれるからだ。理論の外には歴史の体系も存在しない。事実を選抜し、認識するための原理がないことになるからだ。

だが、あらゆる理論は、事実そのものへの関心によって示唆された作業仮説であり、必要な事実を抽出し、体系にまとめるためにのみ必要なものなのである。⁴⁶

ヤコブソンが、このようなエイヘンバウムの世界観とは対照的に、实在／現実が合目的性と法則性を有していると考えていたことは、これまでにすでに指摘したとおりである。現実の諸現象自体が目的と法則を持つ体系であるならば、表象(詩や詩学)が現実から峻

⁴⁵ Там же. / 同上, 209-210 頁。

⁴⁶ Эйхенбаум. Б. Литературный быт // О литературе. М., 1987. С. 428. / エイヘンバウム (小平武訳) 「文学の風俗・慣習」水野編『ロシア・フォルマリズム文学論集1』, 285-286 頁。

別され、独自の法則や目的を有する必要はない。それはむしろ現実に根ざしていないという意味で「虚構」ということになる。ヤコブソンが「(詩学それ自体の) 目的論的原理」に立脚する詩学の自律性を否定し、「現象そのものから出発する」言語学の拡張を主張したのは、言語を含む世界の合目的性と法則性を彼が確信していたからである。

7.

我々は多元論者だ。生は多様であり、一つの要因に帰することなどできはしない。[...] 生は川のように——間断なき奔流として動いているが、しかしその川からは無限数の細流がながれ出ており、その一つ一つが独自なのである。いっぽう芸術は、この奔流の分流ですらなく、それらの上に架かる橋だ。[...] 学問は創造行為であり、創造とは有機的な過程である [...]。⁴⁷

エイヘンバウムの 1922 年の文章だが、ここには彼の世界認識が凝縮的に表れているだろう。「間断なき奔流」である「生」は実体／実在を指す。エイヘンバウムはベルクソンの講演録の翻訳について書評を書いたこともあり、この「生の哲学者」から一定の影響を受けていたことがわかっている。「間断なき奔流」としての「生」のイメージは、直接には『創造的進化』からの連想だろう。ただしベルクソンとは違って、直観による「生」の直接体験に対する期待は、エイヘンバウムにはない。彼がソシュールに言及したままとまった文章は確認できていないけれども、「生」との非連続性を自覚しつつ、合目的的な体系の構築をめざした点で、ソシュールとエイヘンバウムは軌を一にしていたのである。体系であるという意味では、芸術も学問も変わりはない。いずれも「生」という奔流の上に架けられた「橋」である。

エイヘンバウムは「創造」が「有機的な (органический) 過程」であると述べているが、彼の「有機的」という語の使い方には少し説明が必要だ。この語をエイヘンバウムは「些末なもの、偶然のものがその中に何一つない、内部から発展していく合法的な体系」⁴⁸ の意味で用いている。これは彼が 1916 年末から急速にフォルマリズムに接近するまでの 10 年間、強く影響を受けていた哲学者ニコライ・ロスキーの鍵概念「有機的全一」の応用である。

ただし、「オポヤズ」に捧げた 1922 年のこの文章でエイヘンバウムが「有機的」と呼んでいるのは、あくまでも目的論的な体系である「芸術」や「学問」の方である。ロスキーは、その主著の題名『有機的全一としての世界 Мир как органическое целое』からもうかがわれるように、実在世界に法則性や合目的性が内在していると考えていたのだが、エイ

⁴⁷ Эйхенбаум. Б. 5=100 (посвященная Опоязу) // Книжный угол, 1922, № 8. С. 40.

⁴⁸ Эйхенбаум Б. О принципах изучения литературы в средней школе // Русская школа. 1915. № 12. С. 121.

ヘンバウムは、世界が「間断なき奔流」——カオスないし人間にとっては不可知の運動であるという認識の下、「有機的全一」の範囲を芸術作品や学問体系に限定したのである。⁴⁹

一方、これまで見てきたように、世界の法則性・合目的性を前提としたヤコブソンの思考の枠組は、ともに「ロシア・フォルマリズム」に括られてきたエイヘンバウムよりも、むしろロスキーの方に近い。「有機的」はヤコブソンが頻用する語ではなかったが、もし用いていたならば、ロスキーと同じふうに使ったはずである。セリオはその著書『構造と全一性：1920-30年代中東欧における構造主義の知的源泉について』の中で、プラハ時代のヤコブソンやトルベツコイの思潮を「実体論的構造主義 онтологический структурализм」と呼び、⁵⁰ ソシュールの思想と対置している。米国の文芸学者トーマス・セイフリドは『言葉が自己を作った：ロシア言語思想 1860-1930』において、ヤコブソンをバフチンらとともに「言語実体論 the ontology of language」の系譜に位置づけている。⁵¹

本稿はこれらの著書から大きな示唆や刺激を受けているが、しかしヤコブソンは、ソシュールやエイヘンバウムと一線を画する一方で、言語実体論の系譜とも微妙に違っているように思う。本稿で言及してきた研究者たちは皆、「実体（实在／現実）—言語—体系」の相互関係について考えていたのだが、ソシュールが言語＝記号において想定していた「概念」が実際には「実体」と分かちがたいというバンヴェニストの的確な指摘や、⁵² エイヘンバウムが詩テキストを論じる際に「言語」の審級を解体して、朗読の音声を「実体（身体）」、書かれた詩を「体系」として論じている例に見るように、これら三者間の境界は、しばしば研究者によって相対的である。

たとえばバフチンの「言語実体論」は、「実体」の審級を無効化することで成り立っていると言することができる。その初期の論考「言語芸術作品における内容、素材、形式の問題」（1924）の一節を読もう。

価値に完全に無頓着で、完全に偶然的で無秩序な物質（материя）——物質とカオスは概して相対的な概念だが——と関係を有するような文化的創造行為などありえない。そうではなくて、文化的創造行為が関係するのは、必ずや既に評価され、何らかの形で秩序をつけられた何かである […]

そうしたわけなので、認識に先だって在るのは、誰のものでもない物(res nullius)などではなく、あらゆる多様性をはらんだ倫理的行為の現実であり、審美的な眼ざしの現実である。⁵³

⁴⁹ この経緯については中村「1910-20年代のエイヘンバウム」29-33頁を参照されたい。

⁵⁰ *Серво. Структура и целостность*. С. 316.

⁵¹ Thomas Seifrid. *The Word Made Self: Russian Writings on Language, 1860-1930*. (Ithaca and London: Cornell University Press, 2005), pp. 5, 31.

⁵² 注7参照。

⁵³ *Бахтин М.М. К вопросам методологии эстетики словесного творчества. I. Проблема формы,*

バフチンは「現実それ自体(действительность в себе)」、「中性的な現実(нейтральная действительность)」, すなわち実体／実在／現実の審級は, 人間にとって存在しないも同然だと言う。「我々がそれについて語り, それを何かに対置するまさにそのことによって, 我々は何らかのかたちでそれを定義し, 評価している」からだ。⁵⁴「認識と行為とが一次的なものである」。⁵⁵ バフチンは, 本稿の用語でいう実体の審級(物質, 物)があること, それがカオスであることを認めたらうで, しかしそれはつねに価値評価を行う存在である人間とは関りが無いとして, これを視野の外に放逐する。認識と価値評価こそが人間にとって第一義的な基体である。そして言葉は必ず認識と価値評価をはらんでいる。

ヤコブソンは, このように「実体」の審級を無効化して「言語」の審級を実体視したバフチンとは違っている。彼は言語を法則性と合目的性を持った実体としての体系, 構造であると考えていたけれども, 言語外の実体を無効化するのではなく, むしろ言語と言語外とを接続し, 一続きの連続体として捉えようとした。「言語の記号と体系」「言語の本質の探究」といった論考でくり返し, 米国の記号論者パースに肯定的に言及しているのも, 世界の連続性を担保するためである。言語行為の展開の二つの原型——類似に基づくメタファー的展開と近接に基づくメトニミ的展開の別を, 人間の右脳と左脳の機能の差違によって説明しようとした著名な考察も,⁵⁶ このような志向の一環である。ヤコブソンは「実体－言語－体系」が互いに齟齬を来したり, 相殺したりすることのない, 文字通り全一としての世界を想定していたのである。

1956年以降1967年まで, ヤコブソンはほぼ毎年ソ連を訪問して言語学, 心理学, 文学, 文化記号学ほかの専門家と活発に交流し, 祖国の言語学, 記号学の展開に大きな影響を与えた。⁵⁷ 右脳－左脳論もその一つであり, たとえば両脳半球の非対称性をほとんどあらゆる文化現象の基底に見て縦横無尽に論じた, モスクワ記号学派の指導者の一人ヴァチエスラフ・イヴァーノフの著書『偶数と奇数：脳と諸記号システムの非対称』(1978)などを

содержания и материала в словесном художественном творчестве // Собрание сочинений. Т. 1.: философская эстетика 1920-х годов. М., 2003. С. 282-283. / ミハイル・バフチン (伊東一郎訳) 「言語芸術作品における内容, 素材, 形式の問題」『ミハイル・バフチン全著作集第一巻』水声社, 1999年, 396-397頁。

⁵⁴ Там же. С. 284. / 同上, 398頁。

⁵⁵ Там же. С. 288. / 同上, 403頁。

⁵⁶ Roman Jakobson, "Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances," in *On Language*, pp. 115-133. / ロマン・ヤコブソン 「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」『ヤコブソン・コレクション』143-180頁, Jakobson, "Brain and Language," in *On Language*, pp. 498-513 他。

⁵⁷ Иванов Вяч.Вс. Лингвистический путь Романа Якобсона // Роман Якобсон. Избранные работы. М., 1985. С. 13.

生んでいる。⁵⁸

その影響は、ヤコブソンの死後も止むことがなかった。1960年-80年代のソ連記号学を主導した雑誌のひとつ『タルトゥー大学紀要（記号システム論集）』635号（1983年）には、左右の脳半球の機能を片方ずつ抑圧した際に被験者の言語に起きる変化を調査し、各脳半球の機能の差違を実験結果に基づいて明らかにしたデグリンらの共著論文「言語と脳の機能的非対称」が掲載されている。その趣旨をごく大雑把にまとめるなら、右脳は外界の事物や現象を直覚的に受容して単語化すること、左脳はそれらの語を組み合わせる体系的に思考することが主たる機能である。ヤコブソンが思い描いていた「実体→右脳→左脳→言語→体系」という連続体が、実験によって証明されたかたちである。⁵⁹

タルトゥー学派の指導的立場にいたユーリー・ロトマンが、この研究に示した対応は興味深い。彼は、同じ『タルトゥー大学紀要（記号システム論集）』635号に「非対称と対話」と題する論考を掲載し、その中でデグリンらの研究成果に一定の評価を与える一方で、人間の脳半球と文化現象を直結させようとする傾向に対して、次のように書いている。

最も断固として強調しなければならないのは、「右脳性」と「左脳性」という概念を文化的素材に適用するにあたって、我々はこれをごく条件的に（условно）用いるということである。これらの概念は、あたかも括弧に入れるようにして受けとめられなければならない。⁶⁰

この論文では、その他にも全編に渡って、左右脳半球と文化現象との関係について、「あたかも как бы」「類推 аналогия」「パラレル параллель」といった語が頻繁に用いられている。著者ロトマンは、デグリンらの共著論文が構築した「実体→右脳→左脳→言語→文化」の各項の関係を、それこそトニミー的ではなく、メタファー的に描き出そうとしている。あたかも現実と文化、実体と表象のあいだの因果律や連続性を否認しているかのようである。

60年以上に渡って研究の第一線に立ち、一時を除いてソ連の学術的・文化的状況にもコミットし続けたヤコブソンは、やはり知的巨人であったと言わなければならないだろう。本稿で試みたように、ヤコブソンとの距離を基準として見るとき、私たちはロシア・フォルマリズムやモスクワ・タルトゥー学派の内の微妙な差違を識別して、ソ連精神史に新たな光を当てることができそうである。

⁵⁸ 原題 «Чет и нечет: асимметрия мозга и знаковых систем». 邦訳は田中ひろし訳、青木書店、1988年。

⁵⁹ Деглин В., Балонов Л., Долинина И. Язык и функциональная асимметрия мозга // Ученые записки Тартуского государственного университета. Вып. 635 (Труды по знаковым системам 16). 1983. С. 31-41.

⁶⁰ Лотман Ю.М. Асимметрия и диалог // Там же. С. 21.

Тень Якобсона: пробный обзор вопроса «реальность – язык – система» в истории советской семиотики

НАКАМУРА Тадаси

Р. Якобсон до сих пор часто считается одним из преемников «соссюрской школы», а нам следует обратить внимание на тот факт, что он с 1920-х годов до смерти 1982 года повторно критиковал Ф. де Соссюра. В первой половине этой статьи мы исследуем критические замечания Якобсона на Соссюра и находим причину данной критики в разнице их взглядов на реальность, язык и систему.

Соссюр считал, что реальность (языковые факты в себе) необъятна, а элементы которой человек (субъект описания) должен, используя понятия «язык – речь», «синхрония – диахрония» и т. д., вводить в свою телеологическую систему. Его основное понятие «произвольность знака» было выражением подобного его миропонимания. А Якобсон не сомневался в том, что в самой языковой реальности имманентно присуща телеологическая закономерность и следовательно задачей субъекта описания является лишь «метаописание кода, объектно данного в языковом сообществе». Заимсивуя выражение французского ученого П. Серио, мы сможем назвать миропонимание Соссюра эпистемологическим, а Якобсона – онтологическим. Между реальностью и знаковой системой Соссюр видел пропасть и разрыв, а Якобсон – целостность и неразрывность. Со своей точки зрения Якобсон считал лингвистику Соссюра «фикцией» или «иллюзией» в том смысле, что они не опираются на эмпирическую реальность.

На основе подобного миропонимания Якобсон также настаивал на включение поэтики в лингвистику и необходимость доказать связь работ мозговых полушаров с языковыми функциями. На второй половине статьи мы исследуем до сих пор не так замеченные споры Якобсона с Б. Эйхенбаумом, который, убеждаясь в телеологическом характере научных и художественных высказываний, подчеркивал неизбежность независимости поэтики от лингвистики, также с Ю. Лотманом, который намекнул о необходимости «крайне условного» применения понятий «право-» и «левополушарности» к материалам культуры.

Нет сомнения в том, что Якобсон был интеллектуальным гигантом XX века,

中村唯史

оказывавшим широкое влияние и на развитие советской семиотической школы. Если рассмотреть историю русского формализма и советской семиотики, исходя из их отношений с Якобсоном, то мы сможем достичь немало новых знаний и мнений.